



明全戒牒 1巻／紙本墨書／縦 34.9×横 196.2 cm／鎌倉時代 正治元（1199）年

明全が東大寺戒壇において受けた具足戒牒である。その末尾には道元禅師の識語があり、明全の略歴が記される。禅師の識語によれば、明全は延暦寺で菩薩戒を受けたが、入宋にあたって、この具足戒牒を所持したという。つまり、この戒牒は入宋にあたって新たに用意されたものといえる。当時の中国では、比丘戒（四分律の二百五十戒・大僧戒）を重視し、菩薩戒はその後受けることとなっていた。一方、日本では、南都六宗・真言宗・天台宗寺門派は東大寺戒壇院で受戒し、中国と同様の小乘戒壇であった。それに対して、天台宗山門派は、延暦寺の戒壇における授戒は、大乘菩薩戒（『梵網経』の十重禁四十八軽戒）のみでよいとされ、大乘戒壇であった。明全・道元禅師はともに延暦寺戒壇院において、菩薩戒を受けていた。